覚えやすい具体性のある漢字

ある物事が記憶されるためには、まず、その物事について、“関心”がなければなりません。「心ここにあらざれば、見れども見えず、聞けども聞こえず」と、昔から言われているように、心がそこに向けられなければ、見ても見ないのと同じことで、これでは記憶されるはずがありません。

だから、対象に対する関心が強ければ強いほど、心に深く刻みつけられて、その記憶は強く確かなものになる、ということができます。

したがって、「幼児にとって、漢字とかなと、どちらが覚えやすいか」ということの決め手は、「漢字とかなと、どちらが幼児の関心を呼びやすいか」ということになります。

ところで、かなは、単なる音声を表わす文字であるのに対して、漢字は、実在する具体物を直接に表わす文字です。

「鳩」「蟻」……こういう漢字は、従来、字形が複雑だということで、むずかしい漢字とされ、当用漢字表のわくの外に追い出されてしまいました。

しかし、このような、幼児の興味の対象になりやすい“具体物”を直接に表現している漢字は、容易に幼児の“関心”の対象になりますので、ほんとうは“覚えやすい漢字”なのです。事実、幼児は、一瞬のうちに、これらの漢字を覚えてしまいます。

これに反して、単なる音声しか表わしていない“かな”は、幼児の興味や関心の対象とはなりにくいので、結局“覚えにくい文字”ということになるのです。

三歳くらいの幼児の場合は、「鳩」だと関心の対象になりますが、「は」だと全く関心を引きません。零は何個集まっても零ですから、関心を全く引きつけない文字を、どんなに繰り返して教えてみたところで、覚えられないのが当り前です。これが、“鳩”（漢字）を覚えるのに費やした時間の何十倍もの時間を費やしても、“は”（かな）を覚えない」ことの理由です。

「鳩（はと）」という言葉は、幼児にとっては、これ以上分解することのできない“最小単位”です。これを「は」と「と」の二音でできていると考えるのはおとなの考えで、幼児にはできないことです。

また、幼児にこのことを教えてみても、そういうことに何の意味も興味ももつことができないので理解させることができません。

戦後の“かな文字教育”で、「はと」を一語としてまとめて学習させ、「は」と「と」に分解して学習させることを否定しているのは、そのためです。

一年生でさえも、抽象能力が未発達だと考え、できる限り“具体的なもの”として、子供の関心を引きつけるように工夫して学習させているのです。

「はと」は「はと」とまとめて学習させ、「はな」は「はな」とまとめて学習させ、「はと」の「は」と、「はな」の「は」とが、同じ発音であって、同じ文字であることを、子供たちが自ら発見するまでは、これを分解して教えてはならない、と言われています。

このように、一年生でも、かなの学習は、本来の“表音文字”としての用法を避けて、具体的に結びつけて学習させているのです。具体物を直接表わしている漢字が、かなよりも学習しやすく、覚えやすいことに気が付かなかったということは、思えば思慮が足りなかった、と言わざるをえません。